

度に留学生は必修の日本語の授業が週3コマあり、2年生からは選択授業となりますが、その他の授業が英語で行われているため、日本語に触れる機会がどうしても少ないという悩みがあります。そこでこの度、留学生の日本語学習の意欲向上と日頃の学習成果を発揮する場として、兵庫県立大学の留学生を対象としたスピーチコンテストを実施しました。

まず、スピーチコンテストの参加者はコンテストへの登録をし、その後原稿の提出、原稿の修正、原稿読みの練習、さらにはリハーサルを行いました。テーマは日本に関係することから自由に選ぶことができ、「日本の妖怪」や「杉原千畝」「日本人の他人に対する呼び方」など多岐にわたりました。

スピーチコンテストの当日は13名の留学生がスピーチを披露しました。また、聴衆として多数の留学生も参加し、会場は大いに盛り上がりました。コンテスト参加者からは「来年はさらに日本語を上達させ、またチャレンジしたい。」「人の前で日本語を話すことに少し自信を持つことができた。」という声も多数あり、学生の日本語に対するモチベーションがさらに上がったのではないかと考えられます。

上位入賞者の氏名及びタイトルは下記の通りです。

最優秀賞 Wang Tsai Yen

「日本に来てから日本についてど

う思ったか」

1位 Nguyen Phouc Hai Thanh

「日本とベトナムの架け橋になりたい夢」

2位 Muhammad Arief Maulana

「毎日少しずつ改善になる」

3位 Dam Thi Tu Chau

「日本の障害者について私の感想」
日頃は大学内で日本語を使う機会も少ない留学生たちですが、今後このような努力して培った日本語能力を発揮する場を提供していければと思っています。



コンテスト参加者

青春の邂逅

軟式庭球部・部誌「こうとさざざ」(レジェンドかも)

西山 隆(学部11回)

はじめに

私は昭和32年(1957年)に兵庫県立神戸商科大学に入学し、入学式即日軟式庭球部に入学しました。在学4年間、学業は熱心とは言えず成績は普通でしたが、部活は熱心に励みテニスコートの出席率が抜群ということで、主将にも選ばれました。卒業後はテニスから縁遠くなりましたが、私達の時代に創刊した軟式庭球部の部誌「こうとさざざ」は、今でも毎年届けられていま

す。学部6回大西敏夫氏(故人)他の先輩たちのご尽力で組織化されたOB・OG会「淡



現役時代の筆者

水軟式庭球クラブ」も継続して活動を続けています。この素晴らしい部誌もOB・OG会も、その礎となる時々の軟式庭球部の活動が連綿として継続してきたこそのもです。部誌「こうとさざざ」57号(平成29年?)に掲載された私の寄稿文を転載させていただくことで、在学当時の軟式庭球部の活動の様子や部活に係る私のことなどの片鱗を披露させて頂きます。

寄稿文「レジェンドかも」

部誌「こうとさざざ」は、私達の時代の昭和35年5月1日付で創刊されました。この部誌の発行の目的は、創刊に尽力された主務の桃井麒一郎氏(故人)が創刊号に詳しく書かれています。それを要約しますと、先輩との絆や部員間のチームワークを強化すると共に部の記録を整理と残すことにありました。「こうとさざざ」発刊の裏話です。当時は部活費用に困窮しており、部員全員が手分けをして先輩たちの職場を回り寄付をお願いしていました。突然先輩を訪問して「寄付をお願いします」とはなかなか切り出し辛いものです。部員たちの悩みの種だったところ「部誌を作り、手みやげ名刺代わりに持って行こうよ」と誰かが提案し、部員達の総意を得て発刊に到ったのが真相だったと思います。それから57年経ち、部誌のタイトルが「こうとさざざ」に変わったのと(注1)号数が1号少な



軟式庭球部誌 左から創刊号・同復刻版・こおとさいど版・最新版

い（過去に一度だけ未刊の年があった）という些細なことを除けば、部誌は長年に亘り継続されました。後輩の皆様感謝すると共にご同慶の至りであります。学部12回のF氏はこの部誌を創刊号から最新号まで大切に保管されています。この継続にも拍手を送りたいと思います。私達の時代の昭和34年（1959年）に関西学生リーグが創設され（曖昧ですが記憶では6部・1部6校制）、我部は4部に編入されました。当時のチームの主戦力は学部10回、学部11回、学部12回の部員で構成されていました。第1回春季リーグ戦で幸先よく優勝し（3勝2不戦勝）入れ替え戦は相手棄権のラッキーも伴い3部に昇格、続く第2回秋季リ

グ戦も連続優勝し（4勝1敗）入替戦は3勝2敗で勝ち2部に昇格、その後も2部を維持して卒業しました。当時の私達のチームは秀でたプレーヤーはいませんでした。が粒ぞろい（良い意味でのどんぐりの背比べ）でチームワークが良く、総意と協力で部誌を創刊したり、度々ビクニックやコンパをするなど和気あいあいの仲間でした。個人戦では顕著な記録は上げていません。前衛が私で後衛が学部10回のU氏のペアでの近畿六大学個人戦3位が最高成績でした。余談ですが同氏とのペアでパーフェクトゲームを達成したことが楽しい記憶に残っています。パーフェクトとは一つのミスも許されません。最後のポイントは緊張のあまり手がこわばって、ゴルフでいうイップス状態に陥ったことを鮮明に憶えています。私事で恐縮ですが、今年八十路を迎えました（注2）。歳と共に懐古趣味が増してきており過去を振り返ることがよくあります。人生には苦楽色々ありますが、やはり商大軟式庭球部の部活動が楽しい思い出の一つです。上手なプレーヤーでもない私が、この素晴らしいチームで主将を務めさせて頂いたことを有難く思い出すと共に、このチームを誇りに思う気持ちでいっぱいです。「こうとさいど」創刊号に主将の立場で書いた「学生とテニス」と題した文を掲載させて頂きました。いま読み直し、大それたことを書いているなあと恥ずかしい思いと若か



レジェンドチーム?のメンバー（横浜遠征時）

ったなあとの思いが交錯しております。創刊号の部員紹介コラムで同期のA氏〔注3〕が私のことを評して「負けず嫌いでドン・キホーテの蛮勇を思い出す。でもこのホーテ、時には風車に勝つこともあるらしい」と書いてくれています。けなしているようでもあり誉めてくれているようでもあります。当時の私に関して言い得て妙とも思えます。同期の高野幸一氏、桃井麒一郎氏、清水三次氏、〔注3〕は既に亡くなり、同輩に限らず先輩後輩も次々と欠けてきています。今回の寄稿で私達のチームの歴史の一片を知って頂き、少しでも長く記憶に留めて頂ければ幸いです。私達の時代のチームは、ひょっとして「レジェンドかも」。

〔注1〕その後、学部12回F氏の提案で「こうとさいど」に戻りました
 〔注2〕6〜7年前のことで今年86歳になりました
 〔注3〕秋元良太氏／寄稿掲載の後年に逝去

おわりに

以上の寄稿文が掲載されたのを機に、学部12回F氏が保存されていた創刊号をお借りし、業者に持ち込んでコピー製本した復刻版を100部程作り、淡水軟式庭球クラブに寄贈しました。創刊号オリジナルを保存されたF氏、部誌をバトンタッチよろしく継続して頂いた後輩諸氏に改めて感謝いたします。

軟式庭球部と淡水軟式庭球クラブの弥栄そして部誌「こうとさいど」の末永い継続を願っております。

（追記）寄稿文にF氏とあるのは福島弘哲氏のことです。寄稿文を提出した後、福島氏が令和5年4月5日にご逝去されていたことを知りました。福島氏は長年にわたり淡水軟式庭球クラブの会長もされておりました功績を残されました。謹んで哀悼の意を表します。

私と卓球

実末 浩一（学部37回）

私は卓球を中学生の部活から始めました。中学の時は、神戸市兵庫区の大会でも常に1回戦で負けるような大変弱い選手でした（神戸市の大会に進んだことはありませんでした）。

ところが、高校（兵庫高校、進学校でありながら当時は卓球では県下有数の強豪校でインターハイ出場の常連校）に入學してからは、大変ハードな練習に耐えて、『一球入魂』の精神でがむしゃらに練習に励んだことによって、何と高校3年生の時には、兵庫県でシングルスベスト6位に入ることができインターハイに出場することができました。

埼玉県（上尾体育館）で行われたインターハイでは、2回勝ち進んで全国ベスト64位（兵庫県の出場選手の中ではベストの成績）に入ることができました。

た。そして、

その夏に慶応義塾大学卓球部からセレクトション（スポーツ推薦）の



誘いが来ましたが、家庭の経済的な理由から慶応大学への進学を断念しました。しかし、この断念をしたことが結果的に大変良かったのです。なぜなら、神戸商科大学の卓球部に入部することができたからです。

そこでは大変素敵な先輩方や同級生に巡り会うことができました。また私が入部した時には、神戸商科大学卓球部は公立大学でありながら、関西学生卓球連盟のリーグ戦では第2部の強豪校として活躍していました（私も第2部で一度試合に出場しました）。

また、卓球以上に部活動を通じて人間関係の大切さを学ばせていただきました（下宿先で麻雀などもよくしました。また、福井県での合宿先ではお酒をよく飲まされました）。

今でも年に一度の現役生とOBとの交流試合と三宮での懇親会にはできる限り参加しています（素敵な先輩方や同級生や後輩と会って、話したり飲んだりすることが至極幸せな時間です）。

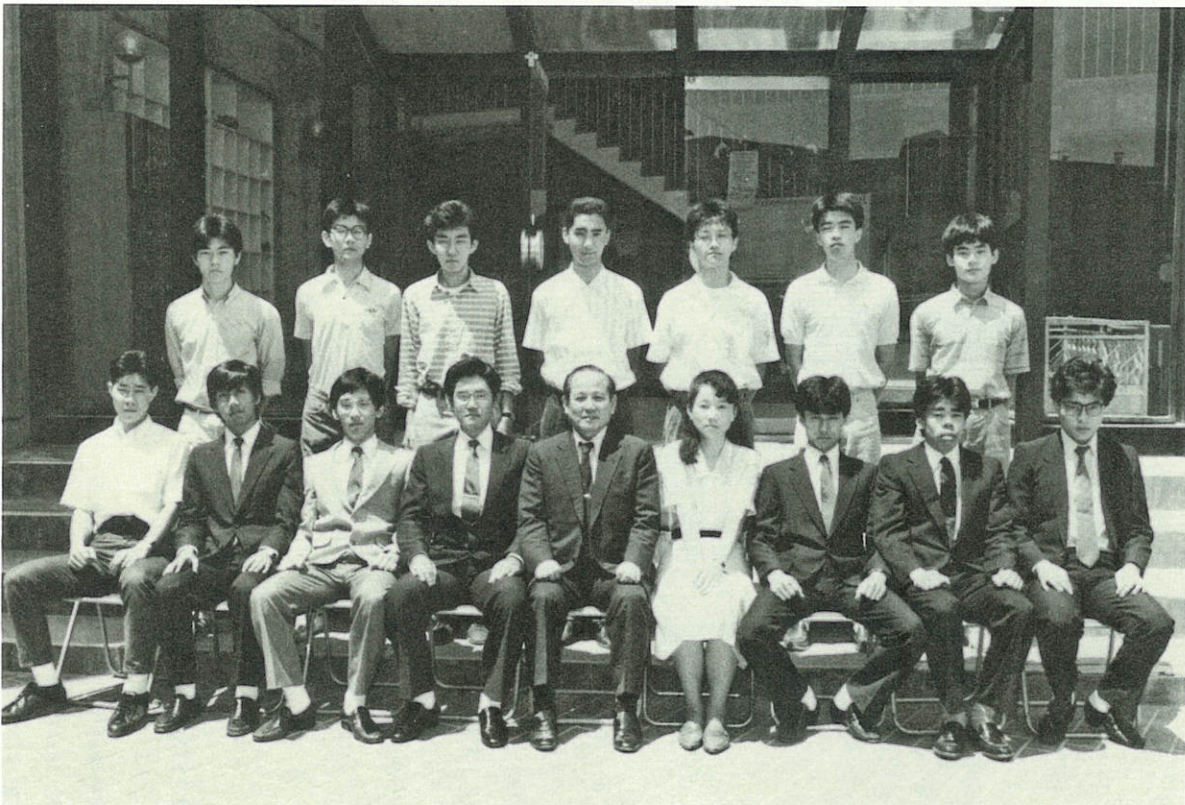
ここで一番言いたかったことは、能力が無くても弱かった者でも、一瞬一瞬に集中して諦めずに努力すれば不可能な事は無いということです。この卓球を通して体得できた根性は、実社会に出ても非常に役立つっており、私の心の糧になっています。

なお、卓球は、雨の日でもできて、運動量も豊富で、1人でも参加することが

できて、生涯を通じてできる素晴らしいスポーツです。

今でも月に一度は地元の社会人の卓球

大会に出場して健康増進に励んでいます。これからも一生涯にわたって卓球を続けていきたいと思っています。



前列左から4人目（卓球部—1987年卒業アルバムより）